

公会主義——その理念と運命——(一)

小 川 圭 治

序——方法と課題

日本において形成された最初のプロテスタントの教会は、一八七二年三月一〇日（旧暦明治五年二月二日）、横浜外人居留地百六十七番の「外人礼拝所建築敷地」⁽¹⁾に、在留外国人のためのユニオン・チャーチ会堂として建てられた小会堂において成立した日本基督公会（耶蘇公会、横浜公会）⁽²⁾である。

この横浜公会の形成が含んでいる問題を、今日の日本の教会が直面する問題意識から最初にとり上げたのは、土肥昭夫氏の論文「日本最初のプロテスタント教会」⁽³⁾であろう。この論文では、横浜公会が「公会主義をとнаえていたこと」が、その特徴の一つとして上げられている（『土肥第一』二七ページ）。

石原謙の論文「日本キリスト教史上における公会主義」（山本茂男牧師献呈論文集『文化対キリスト教の問題』、基督教共助会刊、一九六六年四月所収）⁽⁴⁾は、「公会主義」をテーマに掲げ、横浜公会の成立と理念

について論じている。しかし、この論文では、「公会主義」の概念は、かならずしも一定の定義の下に用いられているのではなく、「公会主義もしくは公会の理想」（『石原』一二九ページ）とか、「今問題とする公会主義思想」（上掲書二二八ページ）などのごとく、公会形成の背景となつた「理想」または「思想」といった幅のある用語として用いられている。

本論文においても、これらの用例にならって、差当って、公会の成立の基礎となつた主張、考え方を「公会主義」と呼びたいと思う。その上で、公会の形成とこの主義を表明した教会史上の文書である「日本基督公会条例」のたどつた運命を、できるかぎり事実在即して明らかにすることにより、「公会主義」の理念の内容を規定し、またそれがたどつた運命の必然性をも究明してみたいと考える。

そこでまず、公会の形成と公会主義のたどつた運命を、できるだけ客観的に、事実経過の順序を追って確認することが課題となつた。本紀要前号（一九七六年、第三七号）に「公会関係年表（一八三七——一八七九）」を編集、発表したのは、そのための基礎作業である。この「年

表」で確認された事実関係を、すでに公表された他の諸研究の解釈とつき合わせながら、筆者なりの解釈を試みることに本論文の課題である。

この予備作業としての年表の作成と本論文において筆者がとりたいた考えた方法は、次の三種類の資料にもとづく三方向からの照明による事実関係の究明ということであった（「公会年表」六一ページ参照）。その第一の資料とは、「公会日誌」、「日本基督公会条例」など公会側の公式文書と、公会で受洗した指導的キリスト者たちの回顧文などである。これは、事実関係をいわば正面からとらえる手がかりとなるであろう。第二の資料は、小沢三郎の研究、整理によって明らかとなった太政官課者の報告文書、「耶蘇教課者各地探索報告書」（早稲田大学「大隈文書」中に所蔵）である。この資料は、事態をいわば裏面から照射することになる。キリスト教信仰をもたず、キリスト教を批判する立場の真宗僧侶などによるものであるから、それなりの保留をつけて用いる必要はあるが、事実関係については、精度の高い客観的報告を含むものと考えてよいであろう。第三資料は、ヘバン、ブラオン、グリーン、バラなど、公会に関係した外人宣教師の宣教師大会での報告や、本国の各派宣教社団への報告書簡である。後者の書簡は、プライバシーの保護のため一定期間公表できないものもあり、そのすべてを活用しえない制限もあるが、高谷道男氏などによる解説、翻訳がなされたものもある。この資料は、事実経過をいわば側面から照射することになるであろう。この三

つの方向からの照射の交わる点に、ほぼ事実と考えてよい事態が浮び上るであろう。

このような方法的視点に立つと、これまで公表された研究や論文は、それぞれに、一面性や偏向をもっている。石原論文は、主として第一資料によっており、第三資料が一部間接的に利用されるだけである。そこに提示された解釈には、本論文の論点に示唆を与えたものも少なくないが、山本秀煌『日本基督教会史』など、二次資料によったところが多く、第二資料はまったく考慮されていない。『土肥第一論文』も、佐波亘編『植村正久とその時代』や山本秀煌などにもとづくものであり、資料の点では石原論文とほぼ同じものを用いている。『土肥第二論文』では、幸日出男氏の論文による第二資料の分析を参照し、組合教会側の一次資料も用いられ、論証も周到になっているが、両論文を通じて、土肥氏の場合には、組合教会の立場からの解釈という偏向が認められる。その具体的な事例については、本論文の論述の中で明らかにして行きたい。大内三郎「日本プロテスタント史」（海老沢有道と共著の『日本キリスト教史』、日本基督教団出版局、一九七〇年一〇月、の後編）の第一章第一節も、公会の形成を論じているが、ほぼ石原論文の線に沿ったものであり、第二、第三資料については、ほとんど考慮されていない。幸日出男氏の論文「日本基督公会について」は、杉井六郎氏の整理、校注によって広く利用されるようになった小沢資料を含めて、上記第三

資料を全面的に用いた精細な分析、検討を行っている。しかし本論文の視点からいえば、幸論文は、第二資料に偏重するきらいがあり、本論文が以下にとり上げる第一資料の補助的部分に対して十分な関心が払われていない。そのために解釈に偏向が認められる。

本論文は、右に上げた諸論文から、さまざまな示唆をうけながら、「公会関係年表」の基礎作業を背景として、公会主義の理念としての内容を、それがたどった運命の事実経過を手がかりとして、確定してみたいと願うものである。その際の解釈の基本線は、拙編著『日本人とキリスト教』のV「教会の形成と変質——異教社会におけるキリスト教——」において試論的に提示されている。しかし本論文においては、この書物に提示された解釈の図式を前面に出すことをせず、まず事実関係の確認から出発したいと思う。

注

- (1) この名称は、『植村』I・四三九ページ(引用文献の略記号は論文末尾の文献表を参照)所収の一九一八年七月の日本宣教師会年会における「横浜教会地所特別委員会報告」による。なお『植村』II・一八七ページ所収の「横浜市史稿」の一節によれば、この地所は、ペリー提督が日米修好条約の交渉を開始した場所であるという。
- (2) 最初の名称の確定には困難がある。土肥昭夫氏も幸日出男氏もともにその困難さを指摘している(『土肥第一』三三ページ。『幸』二七ページ注)。幸氏は『新栄六十年』二八ページのインブリーの談話の引用を典拠として「最初は耶蘇公会、後に日本基督公会と改称した」のを「真相」としているが、

インブリーの横浜渡来は明治八年九月二六日であるから(「公会年表」九八ページ)これに基づくのは適当ではあるまい。むしろ、明治七年一月に起草された超教派のための公会書簡差出人名に「日本東京横浜耶蘇公会総員」とあるのをとるべきであろう(『山本』四一ページ以下)。

- (3) 土肥氏の近著『日本プロテスタント教会の成立と展開』の第一章「日本基督公会の成立と崩壊」は、「まえがき」で著者自身がことわっているように、「テーマは同じであるが、全く新しく執筆したもの」(同書四ページ)であり、本論文では二つの別の論文として扱って行きたい。略記号については、巻末文献表を参照。

- (4) この論文は、内容はほとんどそのまま、「公会主義とその姿勢」と改題、『日本キリスト教史論』に収録された。本論文における引用は、この書による。なお、この石原論文は、前記土肥第一論文には言及していない。

一 前提

横浜公会がそのような形で形成されるに至るのには、それなりの前提条件があったことを見のがしてはならない。

プロテスタントの宣教師が最初に日本に派遣されたのは、一八五九年(安政六年)のことである。その前年の七月二九日には、日米修好通商条約と貿易章程が調印された。その第八条で、外人居留地内の礼拝堂建設と外人の礼拝とが認められた。それをうけて、たまたま、同年九月に、病氣保養その他のために、中国から長崎に来ていたE・W・サイル、H・ウッド、S・W・ウィリアムズらが本国の各派教会に、宣教の時至るとの判断と、宣教師派遣の要請の手紙を送った。これに応えて、

一八五九年には、宣教師がつぎつぎに渡来したのである。

彼らの中に何人かは、中国から直接派遣されたか（J・リギンズ、C・M・ウィリアムズら）、あるいはかつて中国宣教の経験者であった（S・R・ブラオン、J・C・ヘバンら）。石原謙が指摘するように、日本におけるプロテスタント宣教は、欧米の宣教師の側からいえば、中国宣教の一環としてはじめられたのである（『石原』四七ページその他）。この初期のプロテスタント宣教と中国宣教との関係は、まだ内容的に十分解明されたとはいえない。とくに日本宣教の開始とほとんど同じ時期に結成され、宣教をはじめた「中国内地伝道会」の性格、わけてもその超教派主義と横浜公会の公会主義との内容的な対応関係などが解明されなければならない。しかし、少くとも最初に日本に渡来した宣教師たちの念頭には、いつも中国宣教の経験があったことは疑いえない。

たとえば、一八六五年一月五日には、日本における最初のプロテスタントの受洗者矢野元隆（隆山）の病床洗礼式が行なわれた。その日の夕、在留外国人の間で、その感謝のための「懇談祈禱会」（『山本』では「宗教懇談会」）がもたれた。その席でヘバンは次のように述べたという。「モリソン博士の支那伝道は頗る困難で、遅々として進まず、其の初穂を得るに至るまで、拾数年の歳月を費したのに、日本では伝道着手以来僅々四ヶ年で、この基督教嚴禁の地に、最初の受洗者を見るであろうとは。感謝の至りである」（『植村』I・三七ページ以下）

(1) 下)。したがって、ヘバン、ブラオンら、中国伝道の経験のある年輩者たちは、慎重に、長い年月をかける覚悟で、ゆっくりと構えていたようである。

それに対して二年おくれで、一八六一年一月に渡来したJ・バラ夫妻は、宣教師の中でもっとも若く、バラは二九才、マーガレット夫人は、神奈川に船が到着した日に二一才の誕生日を迎えたという（『植村』I・三四九、四〇六ページ）。禁教下で、日本人に最初の洗礼を授けたのもバラであり、またその次の年、一八六六年八月第一日曜日から、在留外人のユニオン・チャーチ礼拝と併行して、最初の日本人礼拝をはじめたのもバラである（「公会年表」七一ページ）。この日本人礼拝について、ブラオンは、八月二七日付のJ・M・フェリス宛の書簡で、やや保留をつけた調子で「あなたの親しいバラは帰って来まして、自宅で安息日のために礼拝を始めています。その成否については、本人から報告がありましょう」と報告している。この手紙が書かれるしばらく前、三月二三日には、バラは子供の養育のためしばらく帰国する夫人と二人の子供をサンフランシスコまで送って行き、単身でただちに日本に向かう便船に乗り、八月一日頃横浜に帰任したばかりであった（『ブラウン』二〇二ページ以下）。また一〇月九日付手紙にも再びこう書いている。「バラ氏は、サンフランシスコから帰って来て、わたしたちの一般礼拝と同じ時間に「主の日」に、集会を始めました。彼の下僕と、わたしの

前の学校の生徒、二、三人ないし四人くらいが出席しているといっています。その中のひとりが聖書を解説し、バラ氏自ら、礼拝の司会者です。いずれ、そのことは、氏が御通知するでしょう」(『ブラウン』二〇八ページ)。「その中のひとり」というのは、おそらく小川義綏のことと考えられる。高谷氏も指摘するごとく、この少数の、しかも在留外人の礼拝の陰にかくれるかのようにして続けられた日本人礼拝が、横浜公会形成への前段階となったのである(『ブラウン』二〇四ページ注(3))。横浜公会の形成については、この若き宣教師バラの信仰の情熱なしには考えることはできない。このキリスト教禁制の見知らぬ国に乗り込んできた青年宣教師と、維新の変革で生きるための精神的基盤も指導的役割りへの登龍の道をも失ったエリート青年たちとの、キリストにある出会いが、耶蘇公会形成への主要な軸の一つになっていることを見のがしてはならない。これが横浜公会形成への主要な前提の一つである。

ここにもう一つ、横浜公会形成の前提となった主要な要素がある。それは福音同盟会 (Evangelical Alliance) の初週祈禱会である。佐波亘によれば、「我が国における初週祈禱会は1860(万延元年)から、宣教師たちと外人の信者によって、宣教師の家で守られた」という(『植村』Ⅱ・四四二ページ)。ブラウンも、同年十二月三一日付の書簡で、「一八六一年一月、世界各国で初週祈禱会が行なわれ、この国民の救い

のため、多くの祈禱がささげられることでありましょう」と述べている(『ブラウン』五七ページ)。この点は、すでに山本秀煌が「日本基督公会と万国福音同盟会との関係」と題した節(『山本』三〇ページ以下)で指摘したところである。山本は前記一八六五年十一月の矢野元隆の受洗とその夜の祈禱会が起縁となり、一八六六年の初週祈禱会参加者は、次の年にはアムステルダムで第六回福音同盟大会が開かれるのを期して、日本における禁教の解除のための祈りを一八六七年初週祈禱会の共通主題に加えるようにとの要請文を各国の福音同盟会に送った(「公会年表」七〇ページ)。そしてのちに立入って検討するように、「日本基督公会条例」の「第一条信仰諸則」九則は、福音同盟会結成(一八四六年)に際して採択された The Doctrinal Basis of the Evangelical Alliance の、ほとんどそのままの翻訳である。

この点から見ると、横浜公会は、宣教師の側からすれば、福音同盟会日本支部といった受けとり方があったのかも知れない。しかしながら、福音同盟会そのものが、個人加盟の信徒運動であり、各教派代表による組織的な教派合同運動でなかったことはたしかである。しかし、それにもかかわらず、福音同盟会は、一つの超教派の、国際的運動であり、のちの世界教会会議の教会一致運動(エキュメニズム)の形成への背景としての雰囲気づくりに重要な役割を果たしたことはたしかである。また日本基督公会や中国内地伝道会の超教派主義の精神的背景となったことも

疑いえない。このような背景としての福音同盟会の初週祈禱会をぬきにしては、横浜公会の成立は考えられないのである。

注

- (1) 矢野元隆の受洗日については、『植村』は一貫して一八六四年説をとる。バラ夫人の日本からの書簡集 M. T. K. Ballagh: *Glimpses of Old Japan* 1861-1866 (1908) の記述に、矢野がキリストの教えを聞きはじめてから三年といった表現もあり、そこから来た混乱であろう。授洗者バラ自身のミッシェン報告、ヘバン夫人の一八六五年一月一八日付書簡 (ed. M. TAKAYA: *The Letters of Dr. J. C. Hepburn, Tokyo 1955, p84 ff.*) などは一八六五年である。したがって、このヘバンの談話の「四年」は、五年の誤りである。『山本』三一ページも同じ資料にもとづく誤りである。バラ夫妻が、ヘバンたちより二年おくれて渡来し、彼らが矢野に接した年数と、宣教開始の年数などが混同されたことからくる混乱ではないかと考えられる。

二 公会の形成

このような前提条件がととのえられつつある間にも、本格的な宣教のための準備が進められていた。ヘバンは、主として言語、文書の面を担当する。一八六六年には、このようなヘバンの努力の最初の成果であるヘバン編の辞書『和英語林集成』が出版され、一八六七年には、マッカ―ティ著ヘバン訳のキリスト教入門書『真理易知』が刊行される。さらに一八六八年には、ヘバン、バラ、タムソンの協力になるマタイ伝の試訳が完成する（「公会年表」七〇ページ）。また一八七〇年ごろには、

公会主義——その理念と運命——(一)

同じくヘバン訳による十戒、主の祈り、使徒信条からなるパンフレット『三要文』も出版された。⁽¹⁾

それと併行して、禁教下の受洗者も増えて行く。一八六八年五月には、粟津高明と鈴木貫一がバラより受洗、さらに一八六九年二月には、小川義綏、鈴木甲次郎、鳥屋だいの三名がタムソンより受洗している（「公会年表」七二ページ以下）。

オランダ出身のフルベッキは、最初長崎に上陸して、オランダ語によって宣教を進めようとする。長崎の宣教も、一応その緒につき、後任として H・スタウト夫妻も着任したので、フルベッキは、一八六九年三月二〇日長崎を立ち、東京へ向かう。そして四月以降は開成学校教師となる。七月には、長老派の C・カロザロスが横浜に渡来する。ブラオンは一八六七年五月の火事で、聖書翻訳の原稿や住居などを焼失し、しばらく帰米していたが、一八六九年八月二七日に、M・キダーを伴って日本へ帰任する。このときまでに日本に渡来したのは、リギンズ、ウィリアムズらの米国監督教会の他に、ヘバン、タムソン、カロザロスらの米国長老会、ブラオン、バラーらの米国和蘭改革派教会と、ゴープルらの米国浸洗自由伝道会社の四つであった。少しおかれて一八六九年一〇月に、組合教会系のアメリカン・ボードの第六〇年会で、はじめて日本宣教開始が決議され、同年十一月には、同派最初の宣教師として D・C・グリーンが横浜に渡来し、しばらく横浜のヘバン宅に寄偶する（『グ

ーン』I・三二、三六ページ以下)。

他方日本人青年たちも次第に横浜に集ってくる。植村正久は、一八七〇年三月に横浜に出て石川彝（いさ）の学塾に入った。九月には本多庸一が横浜に来る。

ついで一八七一年には、バラが中心になって、前記横浜外人居留地百六十七番の外人教会用地に、のちに「聖なる犬小屋」(Sacred Dog-Kennel) とよばれた石の小会堂が建てられる(以上「公会年表」七三ページ以下を参照)。このような背景の推移の中で問題の年、一八七二年を迎えるのである。

前年のクリスマスから、横浜在留の宣教師と外人たちは、福音同盟会の初週祈禱会に入った。その意味と主題について、当時タムソンの日本語教師をしていた小川義綏を通じて聞き知っていた英学校の日本人生徒たちは、自発的に、かれらも同じような祈禱会をもちたいと申出た。このことについて、バラは、明治四四年十一月、バラ博士来朝五十年祝会の席上当時を回顧して次のように語っている。「石造の会堂は日本で第一のリバイバルのあったところ。篠崎桂之助、親切な愛心ある青年、私のところに来て、一時間貸してくれと云ふ。何にするかと聞くと、祈禱会を開くと云ふので貸した。旧正月元日、祈り会を開く。私も一緒に行った。以賽亜書第三二章一三、一四、一五を読んだ。小川さん祈った。続いて外の人祈った。三ヶ月続いてもやめぬ。三月十日九人受洗した」

(『植村』II・二〇六以下)。

この日の出来事については、ブラオンもヘバンも、その書簡ではふれていない。ブラオンは、一八七〇年七月に新潟から横浜に帰り、九月からは、横浜修文館のお傭い教師となっている。したがって「聖なる犬小屋」でのバラの私塾には直接関係はしておらず、この日の出来事も、バラの私塾内の出来事として、それほど注目しなかったであろう。

「公会日誌」にもこの日の記録は欠けており、他の日付より一段低く、「明治五年壬申歳正月元日」という日付のみがある。そして翌正月二日から、バラが使徒行伝の最初から講解をはじめたことが書かれており、その日から連日の記入がある。「公会日誌」が正月元日のみ記事を負っているのは、この祈禱会が、当時者たちにとっても、バラにとっても、予期しない出来事であったからであろう。私は、その偶発性に、日本人生徒たちの自発性を見たいと思う。

また太政官譯者による「耶蘇教譯者各地探索報告書」にも、この日のことは報じられていない。桃江正吉(譯者正木護)の正月九日付け報告に、横浜の開化はそれほどでないと述べたのち、「彼洋教え盛ナルハ実ニ言語ニ絶シ愕然兩之第二御座候」といい、「バラ、ピヤール(ピアソンのことであろう)、キダの学校」は大変盛んだと書いている(小沢三郎『幕末』二八〇ページ以下)。桃江は、三月二日(新暦四月二八日)の第二回洗礼式で受洗するのであるから、このときすでに連日祈禱

会に参加していたものと考えられる。したがって「言語ニ絶シ愕然之次第」というのは、バラのいう「日本で第一のリバイバル」の出来事の直後であろう。山本秀煌は、それを次のように記述している。「バラ師の指導の下に、数名の学生有志の男女相集りて使徒行伝の講義を聴き、熱烈なる説明に感じて互に相祈りつつありしが、出席者意外に多く、少ないも二十名、多き時は三四十名に達するの盛況を呈し、祈禱につぐに祈禱を以てし、感激の念、熱誠の情あふるるばかりにして感興盡くる時なく、預定の一週間の祈禱会は、延いて数週間の長きに亘りて尚ほやまず、祈禱会の進行につれて熱情ますます／＼加はり、中には感泣して神に祈り、初代教会設立当時のペンテコステの日の如く、日本にも聖霊の降臨ましまして切支丹禁制の此の異教の地に、救世主耶穌基督の御栄光のあらわれんことを切願せしもの尠からざりしが、その応驗と言はん……」（『山本』二三ページ以下）。この記述は、ほぼ事実を伝えたものと考えてよいであろう。横浜公会の形成は、この祈禱会に集った日本人たちの、日本における「ペンテコステの日」の体験が起点になっている。次の三月一〇日（旧暦二月二日）の洗礼式と公会の形成はむしろ、その結果だと考えるべきであろう。⁽²⁾

この旧暦元旦の出来事について、「公会日誌」は「晝後四時集会祈禱使徒伝講義バラン師出席五字散衆」という記入を繰り返して行く。二月一日（旧暦正月三日）は「安息日」に当たったので、朝九時から十一

時、午後三時から五時、夜八時から九時の三回集会をもっている。夜の集会は、ピアソン夫人らのいる山手四十八番のアメリカン・ミッション・ホームで行なわれた。連日祈禱会の方は、使徒行伝の連続講解がなされ、日曜の午後と夜はマタイ伝の講解がなされた。三月一三日（旧暦二月五日）で使徒行伝を終え、三月一四日（旧暦二月六日）からヨハネ伝に入っている。

植村正久がバラの英字塾に入ったのは、まさにこの連日祈禱会がはじまって四日目、二月一二日（旧暦正月四日）からであった（「公会年表」七七ページ）。

このようにして、一ヶ月後の日曜日、三月一〇日（旧暦二月二日）を迎える。この日、竹尾、篠崎、押川、戸波ら九名がバラより受洗し、小川、仁村というすでに受洗した二名を加えて、ここに「耶穌公会」が設立される（「公会年表」七七ページ）。この日の出来事についての「公会日誌」の記入は、簡明である。「即安息日九字集会祈禱バラン師出席十一字散集屋後三字集会祈禱バラン師馬太伝講義畢り受洗の者九人アリ長老の選アリ小川当撰ナリ即チブラオン師バラン師手ヲ按イテ権を授ク……」（「公会日誌」七七ページ参照）。

この公会設立の日の出来事については、諜者も報告している。小沢三郎がその筆蹟から諜者豊田道二のものと推定している「東京邪宗門探索書」（壬申正月、二月二日差出ス）によれば、横浜から小川義綏が来

て、公会設立の礼拝への出席を勧めている。まず横浜ではキリスト教への関心が高まり、「官ヨリモ最早制止モ御座ナク却テススメル位ヒニテ一入喜ンテオリマス」と告げ、つづいて「就テハ当二月初ノ日曜日ニハ信仰ノモノ一同集議シテ互ニ一致シテ宗教を弘ムルツモリニテ東京ヨリモ両三人出浜ノ約束デ御座リマス何卒彼方モ御繰合御出ヲ願ヒマス」と話したという（『小沢資料』一、一八二ページ）。この報告は、公会設立の当日差出しになっており、一二項目の報告中の最後になっているから、旧暦一月下旬頃に、小川義綏は、旧暦二月二日の公会設立と洗礼式の準備のため連絡に歩いているのがわかる。

同じ豊田道二報告と推定されている「切支丹耶蘇教事情言上書」（壬申二月）は、「壬申二月日曜日ナリ横浜居留支切丹教師バラノ許ニテ彼宗ニ沈ミシ者公然洗礼ヲ受シ当日事情書」と題して、当日の情景をくわしく報告している（『小沢資料』一、一八三ページ以下）。この報告は、先に引用した「公会日誌」の簡略な記述を補う、くわしい情景描写となっている。まず第一項目で、先の報告につづく最近の情勢をまとめた報告をしている。その末尾に、先の小川義綏の話と重なる公会設立の件を「春ニ至リ彼教師自ラ」が提案したと記している。そして第二項目では、当日のバラ教師の発言を含め次のように報告している。「二月二日第九字信不信ノ生徒数十輩幅湊セル中ニテ教師バラ云ク今日ハ別テ難有日ニテ此人タチ実ニ洗礼ヲ望ミ私シ耶蘇キリストニ代リテ洗礼ヲサツ

ケマスソレニ付テハ公会ヲ立ル事モ兼テ咄シマス通り追々此道弘マルニ付テハ必スナクテハナリマセヌ此公会ノ立方ニハイロ／＼ガアリテ国々所々少シツ、規則ガ違ヒマス然シ私共ノ宗旨テハ凡ソメリケンノ政事ニ従ヒ長老ノ官ヲ立テ、此会ヲ守ラ子ハナラヌ夫故今モ彼方寺ノ内ニテ礼入ヲシテ長老ヲ選ヒ互ニ申シ合セテ夫々ノ規則ヲ立テ玉ヘ吾ノ考フル所口是／＼ナリト其規ヲ挙タリ取捨衆議ニ任スヘシ云云」（一八二ページ）。それにつづいて「公会日誌」と同様、小川廉之助の当選を報じ、九名の受洗者名も、一、二の字の違いをのぞいて、「公会名簿」と正確に対応している。洗礼試問、洗礼式、小川長老の按手礼、聖晚餐式の次第などを正確に伝えている。

この報告は全体として、事実に関しては正確である。諺者正木護も小栗憲一宛、二月六日付で「壬申二月九日到来」と朱筆の書き入れのある報告で、「二月二日安息日バラ学校ニテ洗礼之式」として、「公会日誌」よりややくわしい程度の記録をのこしている（『幕末』二八三ページ以下）。これら諺者報告は、事実経過などについては正確な記録と考えられるが、幸氏も指摘するごとく、「主として宣教師に焦点をあてている」（『幸』二九ページ）報告であり、さらに邪宗の侵入を慨嘆し、害毒を流すものとする立場から書かれていることに留意しなければならぬ。たとえば、豊田報告なども、洗礼者名、式次第などは正確であるが、洗礼式後の祈禱文など、われわれが関心をもつ内容的な事柄につい

ては、「ソノ言語実ニ聞クニ忍ビス」として記録していない。

ブラオンは、六月二四日付の手紙ではじめて公会の設立を報告している。「バラ氏は、当地の宣教事業に関し、かなり詳細に報告している」とと存じます。最近、非常に、伝道の氣運が高まりました。神の靈は、明らかに、この港にいる日本人の心を動かしているように見えます。三ヶ月ばかり前に、一人の会員で組織された小さい教会に加入する者が絶えません」（『ブラウン』二六六ページ）。ヘバンも、七月二二日付の手紙で「昨日はじめて横浜公会の礼拝に出席して、大きな喜びをえた」（『ヘボン』一一五ページ）と述べている。はじめは、これら年輩の宣教師たちは、公会の行末をそれほど確実とは考えず、三ヶ月くらいたつてはじめて公式に報告しているのである。

このような三つの資料からの検討によって、横浜公会の創立の事情は、ほぼ明らかになったと思う。この点について杉井六郎氏をはじめとして、幸、土肥両氏からも主として謀者の報告によって、山本秀煌の「日本独立自治の団体として」という見方に疑義が提出されている⁽³⁾。しかし山本秀煌のこの言葉は、「外国の何れの教派にもぞくせざる日本独立自治の団体として」とつづくのであって、たしかに言い過ぎのきらいはあるが、超教派という点に主要な強調があるのである（『山本』二四ページ）。しかし、そこから幸氏のように、「日本人側」は、「設立する教会や規則については、ほとんど何も理解できず、バラの説明をその

ままうのみにしたということではあるまいか」（『幸』三〇ページ）と推定してよいであろうか。バラは、なるべく英語を用いず、下手な日本語で語り、規則の原案は示したが「取捨衆議ニ任スベシ」といっている。またその前の「メリケンノ政治ニ従ヒ」とは、今日の表現でいえばデモクラシーに従ってということであって、アメリカ追従の意味ではない。私は、二ヶ月前の初週祈禱会における日本人側の自発性が、ここで変質したとは思えない。むしろそれを汲み上げるためのデモクラシーではなかったかと思う。

また土肥氏は、「バラは……規則を示し、日本人信徒にその取捨選択をゆだねた」と、その点は顧慮しつつも、つづいて「彼らはバラに教えられるままに、これによって小川を長老にえらんだことになる」という（『土肥第二』二六六ページ）。そして「この教会は形態としてはあくらかに長老制の教会である。この教会に八公会Vという名称がつけられたからといって、教派的教会でないという意味内容であったと見ることはできない」とする（二七ページ）。「公会」が church の訳であり、おそらく「教会」とほぼ同義の換え辞として使われ、『三要文』中の使徒信条の訳から明らかなように「あまねき公会」（catholic church）の意味でないことは、すでに石原論文の指摘もあり、そのとおりであろう。しかし、「長老ノ官ヲ立テ、」を直ちに教会組織上の長老主義といえるであろうか。むしろ、各個教会の責任者を選び、民主主義的秩序を立て

るということから、最少限度の組織づくりとして、プレスビテリーとシノッドを考えたい。各個教会主義に立ち、組織も信条もいらないというアナキーでないならば、名称は、執事、役員、その他としても、なんらかの責任的秩序なしには教会形成はありえない。私は、横浜公会の最初の長老選挙を、このようなものとして理解したいと思う。

ところが、この前後からのブラオンの書簡には、バラの健康に対する憂慮の言葉が現われる。先の横浜公会成立を報告した六月二十四日付の手紙、もその報告につづいて、こう書いている。「バラ氏の健康は、けっしてよくありません。諸集會に出席したり、熱心な聴衆に聖書の講解をしたりして興奮すると、そのあと、病気がぶり返して、健康を回復するために、かなり、長期の休養を必要とすることがよくあります。バラ氏の負担を軽くするために、わたしは、祈禱会とバイブル・クラスと同時に行なう日曜日の夕方の集會を引き受けています」(『ブラウン』二六七ページ)。次の八月五日付書簡でも、「D・タムソン師は、バラ氏が休養して健康を回復するようにと、同氏にかわってやっています」といっている(二七二ページ)。これは「公会日誌」第一の七月九日(旧暦六月四日)および七月二二日(旧暦六月一七日)の記事と対応する(「公会年表」七九ページ)。さらにその追伸に、「内密ですが、わたし自身、およびタムソン氏ならびにプリュイン氏の意見として、バラ氏は、一年間、休養のため、帰国すべきであると思います。彼の頭脳は、

ひどく弱っているようです。帰国するよう、わたしは、バラ氏に勧めているのです。しかし、今、彼は帰国したくないようです」とある(『ブラウン』二七七ページ)。これで見ると、バラは、精神過労に陥入っているようである。他方諜者の報告はバラについて次のようにいう。「是迄ピヤルソン学校テハ安息日夜耳バラ来テ新約之肝文ヲ講ス……バラ邪弁ヲ以一度説トキハ十二八九ハ必ス伏スル色相見候夷ニ彼カ宗門ノ為ニ身心ノ勞ヲ厭ハス尽力ノ相タ乍敵可感程之事也……」(『幕末』二八三ページ)。五月一九日(旧暦四月一三日)付の諜者安藤劉太郎報告によると、バラとタムソンの木更津方面への伝道について述べ、次のように書いている。「同家主人其他之耄両輩モ未タ其法ヲ信スル者不至哉ニ御座候得共何分タムソンバラ之人材ニ者余程心醉致シ居候条愚察仕候」(『幕末』三二七ページ)。バラが「身心ノ勞」をいとわずに宣教にあたり、その人格に感銘をうける者も少くなかったことがわかる。

このことは、すでに(一)において述べたように、若き宣教師バラの信仰の情熱と日本人青年たちの激しい精神的な出会いの反映と見るべきではないか。その後、ブラオンの書簡からも、バラの病気の件は見当らなくなるので、間もなく元気になったのであろう。このバラの熱心を、バラの一方的指導性と日本人青年の自主性のない追従と考えるのは誤まりであらう。パウロもいうように、「宣べ伝える者がいなくては、どうして聞くことがあろうか」(ローマ書一〇・一四)。信仰には基本的に受身

の面がある。M・ルターによれば、われわれの義も「受身の義」*justitia passiva* である。神の絶対的超越性のゆえに、福音は、「目いまだ見ず、耳いまだ聞かない」、異質的な音ずれである。信仰内容にしても、教会組織にしても、まずは伝承を正しく受けとめるところから出発するのである。それをどこまで、主体的、責任的に受けとめ、自己のものとするか。そこに自主性と独立が問われるのである。したがって次に、教会組織を、耶蘇公会の日本人たちがどのように受けとめたかを見て行きたいと思う。⁽⁴⁾

注

- (1) 『三要文』の刊行は、「公会年表」では、諜者正木護（桃江正吉）の報告に、明治六年二月二五日の号外としてそえられており、『植村』Ⅳ・三六一ページの年表も六年としているので、明治六年説をとったが、『植村』Ⅳ・五九ページの考証にしたがって一八七〇年ごろとするのが正しいと思う。
- (2) 『土肥第一論文』では、この出来事を「異常な興奮状態」としつつも、「ペンテコステの状態」とする山本の表現に賛成している（同論文、二六ページ。とくにその注④参照）。しかし『土肥第二論文』ではこのことにはまったくふれていない。石原論文も「日本のプロテスタント・キリスト教の起源」を旧暦二月二日の洗礼式においており、旧暦正月元日の出来事にはふれていない（『石原』一二六ページ以下）。幸論文は、土肥第二論文が指摘するように、「正確な資料に基づいた叙述ではなく、それら事件の外的な記録により、また周囲の情勢を参照して推定した」と自認される石原論文（一二九ページ）よりは、「正確に事実経過をとらえている」（『土肥第二』一八ページ）のであるが、「序」において述べたように、第二資料に偏重してい

るために、この出来事にはまったくふれず、石原論文と同様に、旧暦二月二日の出来事から出発する（『幸』二六ページ）。この点が、土肥論文、幸論文が、公会における日本人信徒の自主性への疑問、またはその否定へとつながって行くと思う。私は、むしろ、この出来事に、日本人信徒の自発性を見るのである。

- (3) 杉井六郎「諜者の見た初期教会形成過程——横浜の場合——」（住谷悦治編）日本におけるキリスト教と社会問題、みすず書房 一九六三年。一九八ページ以下。とくに二二六ページ。

(4) 土肥氏は、横浜外人居留地百六十七番に一八七五年七月一〇日に建堂式を上げた大会堂の建築に日本人信徒の出費がなかったことから、横浜公会の自給独立に疑義をいだき、自給独立につとめていた阪神側公会との「いきさつのちがいに」「合同不成立の原因」まで求めようとしているが、これは誤解であろう（『土肥第二』四五ページ以下）。先にも述べたようにこの敷地は、「外人礼拝所建築敷地」として領事館からもらいうけていたものであり、そこに領事館関係の建物を建てたいとの話も出たために急遽募金して建てられたのである。したがって在留外人のユニオン・チャーチ会堂だと日本人側でも考えており、それを借りているという意識であった。（『植村』Ⅰ・三六一、四四三ページ）。それに先立って、同年六月一九日に献堂式を上げた東京築地の東京公会会堂については、諜者の報告に次のようにある。「日本人ノ所有トシテ建ルノ会堂是レカ始メナリ」（「東京耶蘇教事情第八号、明治八年三月」とある（『塩入』一三六ページ）。さらに同年八月の同十一号報告によると「建築ノ失費九百四十円余内二百九十円日本信者ヨリ出シ残り六百五十円外国人ヨリ出ス已来月々五円四十銭ノ地代ハ信者ノ募金中ヨリ払フベシ……」とある『塩入』一三八ページ）。日本人信徒も努力していないわけではない。少くとも土肥氏の立論には無理があると思う。

三 公会条例の成立

公会主義の内容を表明している資料は、「日本基督公会条例」と、その前段階となった草案とである。したがって、すでに明らかにしたような前提の下で、あのような形成の経過をたどった公会において、それがどのようにして起草され、どのような運命をたどったかを明らかにし、それによって公会主義の理念としての内容を明らかにして見たいと思う。

譯者豊田道二報告は、一八七二年三月一〇日の公会設立に当ってバラが「吾ノ考フル所口是くナリト其規則ヲ挙タリ」と記しているが、その内容はどのようなものかわからない。幸氏の論文がくわしく検討しているように、その後豊田道二の報告と推定される「壬申三月十二日差出」の「三月六日講会ソサイヤチ（朱）耶蘇教邪徒公会規定写」（『小沢史料』一、一八六ページ以下）と安藤劉太郎、三月十三日付、「壬申三月十五日到来」の「公会定規」（『幕末』三一九ページ以下）がある。二つを比較すると、前者の「第一」が後者では「第一惣規」となり、「会中規則」が「会中例則」となり、「第一」の一条、「第二可信事」の一〇条、「第三可行事」の五条、「会中例則」の十三条まで、条文の順序は全く同じであるが、後者は末尾にもう一条日曜日の献金規定が追加されており、「已上 明治五壬申三月 横浜教会」という末尾がついている。その他多少の文字の異同をのぞいて、まったく同じ草案である。豊

田報告は、一八七二年四月一三日（旧曆三月六日）の「講会ソサイヤチ」に提出されたとしている。この日は土曜日であるが、「公会日誌」にはなんの記載もなく、前日と同じことを示す「同断」の二字があるだけである。翌日の日曜日の記事もこのことにはふれていない。「講会ソサイヤチ」がなにかもわからない。安藤報告は別紙をそえて、そこには、「右者一往之大概ヲ揭示致シ候事ニテ則チ一昨十一日教師長老其他会衆再議之上増減之ケ条モ数件在之候」と述べている。ここで注目したいのは、この草案が英語ではなく、漢文であった点である。漢文は、横浜と東京における初期の宣教師と日本人知識人との間の唯一のコミュニケーション・メディアであった。中国宣教の経験がある宣教師は中国語で発音し、日本人は漢文として読んだのである。ここでは両者対等のコミュニケーションが成立する。しかも、このような漢文のテキストによって「教師長老其他会衆再議」にかけたという譯者報告に注意したい。日本人信徒は、内容もよくわからないまま、ただ与えられたものをうのみにしたといった解釈は成立しないのである。

またこの「公会規定」または「公会定規」は、公会創立の日から一ヶ月も立たぬときに提案されたものであるから、創立の日のバラの提案になる粗案も、ほぼ同じ内容のものであったろうと考えられる。少くともバラがそこで継続審議を提案したことが、このような形になって討議されたことはたしかである。

その内容については、幸氏論文にやや立入った検討があり、ここでは細部にわたって論じることはいらない。ただ本論文のテーマとの関連で一、二注意しておきたい。まず「第一」は、聖書原理であるが、それにづく「第二可信事」の一〇条とは、信仰内容を示すものであるが、のちの「日本基督公会条例」の「信仰諸則」となった福音同盟会の「The Doctrinal Basis 九ヶ条」とはまったく対応しない。福音同盟会の九ヶ条は、最後の段階になってはじめてとり入れられたようである。「第三可行事」の五ヶ条では、偶像礼拝や死者崇拜を戒めているのは、幸氏も指摘するように日本の状況をふまえたものであろう。とくに注目しておきたいのは、次の「会中規則」の第一条である。すなわち「凡欲加会者須知所以有教会之意諸兄弟因主之名而集成為一体欲蒙救主之恩助也」とある。入会者は、主の名によって集められたのであるから、一体とならなければならぬというのである。のちの「公会条例」などの超教派条項の前段階といえるであろう。さらに、第三条では、教会内における長老の職務を規定し、第四条では、長老の任期を二年としている。これで直ちに長老主義だというのは、概念規定の混乱でしかないが、少くとも長老をおくという線はつらぬかれている。安藤報告は、三月十一日の会議で、総会の三分の二で「規則」の改正ができること、長老とび教師の戒規の三条が追加されたことを報じている。

つづく四月二八日（旧暦三月二一日）の日曜日には、諜者正木護が桃

江正吉の名で加わる六人がバラより受洗している（「公会年表」七八ページ）。また五月一二日（旧暦四月六日）には、中国へ派遣されるアメリカの宣教師四名来会し、「上海ノ新聞ヲ得タリ」と「公会日誌」は伝えている。日本人信徒も中国宣教の状況に関心をいだいている。六月九日（旧暦五月四日）には、本多庸一を含む五人がバラより受洗している。七月九日（旧暦六月四日）には、タムソンが日本人渡航者案内の旅から横浜に帰任し、前記のとおり、疲れを覚えているバラに協力する。八月四日（旧暦七月一日）には、上海より避暑のため横浜に来たS・W・ウィリアムズを迎えて礼拝を行い、奥野昌綱がブラオンより受洗している（「公会年表」七八ページ以下）。このようにして、九月二〇日から、横浜における第一回宣教師会議を迎えるわけである。

しかしこの間に「公会規定」について討議された記録は、今日のこっていない。「公会条例」に至る中間段階として『植村』I・四五二以下にのこっている「公会規則」は、幸氏が詳細に検討しているように、おそらく一〇月五日（旧暦九月三日）の秋期総会で決定された改訂規定であろう。そこに至るまでに九月の第一回宣教師会議が行なわれるのである。この宣教師会議は、資料により、期間や参加者にズレがある。その一つの理由は、大阪、神戸、長崎などから参加した宣教師が、一日ばかり早く集って、予備会議を開いたり、会議後、調整のためにのこった人たちとの会合を、この宣教師会議に入れるかどうかにあったと思われる

(「公会年表」八〇ページ以下)。このような問題にはここでは立入らないで、公会主義の内容とかかわる点のみをとり下げておきたい。

まずこの宣教師会議の議題は、三つだと考えられる。(一)聖書翻訳 (二)医療伝道の問題など宣教方針の決定、(三)日本人問題設立の問題、である(『植村』Ⅲ・六五七ページ)。(一)については、すでに予備的に話合われていたので、比較的簡単に承認され、委員として宣教師四人、日本人二人を選出した(「公会年表」八一ページ)。(二)についても合意がえられたが、(三)の問題中、とくに超教派の問題について議論が紛糾した。豊田道二報告も、「四派ノ教師各々其所モアレハ大議論トナリ、七時ヨリ十二時ニ至テ終ニ決セスシテ散会セリ」と記している(『小沢史料』一、二〇六ページ)。問題は次の日に持ち越して、翌九月二四日について、「公会日誌」は、「朝八字可林多後書タムソン師講議之今二字半三十九番ニ於テ教師集会ニテ横浜建シヨリ此後建ツ所ノ公会モ一名一会ノ説アリ会中ノ者十人例序定ル所議随分一致ノ仕法ニイタル可トノ事ニテ五時頃散集今夜又集会アレトモ会中ノ者序ニ出ズ」と記している(『公会日誌』)。また豊田道二報告によれば、「廿二日(九月二四日のこと)第二時半ヨリ集会昨夜ノ論シカカリ又々対論トナリ問答応伏スレトモ終ニ一定セズ此レハ来春ノ会乞延引スベシ併シ今バラ門下ニ於テ春来一公会ヲ立タレハ此儘ニテ彼公会ヲツノルベシ成文日本国中一公会ト致シ度モノナリトテ此論終ル……」という(『小沢史料』一、二〇六

ページ)。

両記事が最後に妥協線を見出したしたのは、議長ブラオン自身が議長をグリーンに譲って提出した案が承認されたからである。その当時、小川義綏によって訳された案文は次の通りである。

「基督の教会は彼に於て一つなり。而うしてプロテスタントの間に宗派の分立することは假令信徒の活ける統一に影響なしとはいへ、基督教国に於ても教会の一つなることを曖昧ならしむる意外の出来事なり。況んや斯る分離の歴史を了解する能わざる異教国に於てをや。我等はプロテスタント宣教師として、互に区別を立つる所より生ずる弊害を能ふべきだけ避けんが為め、我等の伝道の遺り口と方法とを統一せしめんとを希望す。かるが故に我等は此会議に於て、今後我等の助力を求めらるる日本人の教会の組織せられたるときは、其名称も組織も成るべく同一ならしむるやう我等の感化力を用ふるに同意すべきことを提議せられし最初の機会に際す。其の教会の名称は基督公会 (Church of Christ) てふ公同のものにして其の組織は各教会とも牧師及び長老が会員の同意を経て治会のことと当るべきなり」(『植村』Ⅲ・六五八ページ)。

この会議の経過を見て注意すべき二、三の点がある。まず、宣教師会議ではあるが、横浜公会の集会はそのままつづけられ、聖書講義、祈禱会などは、会議に組み込まれており、日本人信徒代表数名も、主な会議には出席していることである。次に、先の「公会日誌」「豊田報告」な

どこからも明らかなごとく、教派問題については相当突込んだ激論が戦かわされており、日本人側もそれに注目している点である。公会主義の超教派主義が、教派の対立についてなんの予備知識もない日本人信徒の描いた理想の夢といった理解は、今日の眼による読み込みである。宣教師会議で「一名一会ノ説」を主張してゆずらなかったのはバラである。そのためにブラオンは議長を下りて調停案をつくらざるをえなかったのであろう。またブラオン調停案は、一致の内容についてはまったくオーブンにしてあるが、教派主義批判の論点は明確である。このような案を全員が承認したことは重要である。

このブラオン調停案の線に沿って、「公会条例」がつくり上げられるのである。

追記 本稿は、このあと、「公会条例」の内容としての理念の検討、長老派教派主義との分裂の経過、関西の組合系公会との合同の失敗の経緯、などをたどる予定であったが、所定の分量をはるかに越えることが明らかになったので、のこりは(二)として発表したいと考えている。

参考文献

- 1 横浜日本基督公会「公会日誌」第一、第二、「公日」一、二、東京女子大学附

公会主義——その理念と運命——(一)

- 属比較文化研究所蔵「植村記念 佐波文庫」特殊資料（以下「佐波文庫」）
- 2 横浜日本基督公会「公会名簿」「公会名簿」「佐波文庫」
 - 3 高谷道男編訳「S・R・ブラウン書簡集——幕末明治初期宣教師記録——」（日本基督教団出版局、一九六五年）「ブラウン」
 - 4 「くボン書簡集」*The Letters of Dr. J. C. Hepburn*, edited by M. Takaya, (東信書房、一九五五年)「くボン」
 - 5 茂義樹編訳「D・C・グリーンの手紙」(一)、(二)、「梅花短期大学研究紀要」19号、一九七〇年、20号、一九七一年「グリーン」I、II
 - 6 杉井六郎校注「小沢三郎編日本プロテスタント史史料」(一)、(二)（同志社大学人文科学研究所「キリスト教社会問題研究」20号、一九七二年、21号、一九七三年）「小沢史料」I、II
 - 7 G. F. Verbeck: "History of Protestant Missions in Japan", in: *Proceeding of the General Conference of the Protestant Missions of Japan, Held at Osaka Japan, April 1883, Yokohama, 1883, pp. 23-185.* [Verbeck]
 - 8 佐波亘編「植村正久とその時代」全五巻とその補遺（教文館、一九三八年、再版一九六六年）「植村」I~V
 - 9 山本秀煌「日本基督教会史」(日本基督教会事務所、一九二九年)「山本」
 - 10 海老沢有道・大内三郎「日本キリスト教史」(日本基督教団出版局、一九七〇年)「日キ史」
 - 11 小川圭治編「日本人とキリスト教」(三省堂、一九七三年)「日本人」
 - 12 山本秀煌「日本基督教新栄教会六十年史」(東京、一九三三年)「新栄六十年」
 - 13 青芳勝久「植村正久伝」(教文館、一九三五年)「青芳」
 - 14 石原謙「日本キリスト教史論」(新教出版社、一九六七年)「石原」
 - 15 小沢三郎「日本プロテスタント史研究」(東海大学出版会、一九六四年)「日本ブ」

16 小沢三郎「幕末明治耶蘇教史研究」(日本基督教団出版局、一九七三年)

〔幕末〕

17 土肥昭夫「日本最初のプロテスタント教会」(『キリスト教社会問題研究』

一九六四年三月)〔『土肥第一』〕

18 土肥昭夫『日本プロテスタント教会の成立と展開』(日本基督教団出版局、

一九七五年一〇月)〔『土肥第二』〕

19 幸日出男「日本基督公会について」(同志社大学人文科学研究所キリスト教
社会問題研究会編『日本の近代化とキリスト教』、新教出版社、一九七三年)

〔幸〕

20 小川圭治編「公会関係年表(一八三七——一八七九)」、東京女子大学比較文
化研究所『紀要』第三七巻、一九七六年一月。〔『公会年表』〕

21 塩入隆「譯者報告にみえる明治七・八年の教会——耶蘇教徒取調一件書類の
紹介——」(長野工業高等専門学校『紀要』、第一号、一九六五年九月)
〔『塩入』〕

〔本学文理学部教授(哲学) 一九七二—七四年度 総合研究員〕